雲晴

新年号

「雲晴」第三十三号
令和二年一月一日発行

貞林院瑞正寺
〒125-0041 東京都葛飾区東金町五－四六－五
電話（〇三）三六二七－三四一一
ＦＡＸ（〇三）五六九九－五九一五

謹んで新春のお慶びを申し上げます

令和になって初めてのお正月を迎えました。今年の干支は庚子（かのえ・ね）動物でいうとねずみ年となります。十干と十二支の組み合わせは六十通りありますので、六十年前の昭和三十五年庚子生まれの方は文字通り還暦を迎えることとなります。

天皇陛下も今年の二月に還暦をお迎えになられる訳ですが、きっと新たなスタートを切るお気持ちで新年をお迎えのことと思います。昨年の五月一日に陛下がご即位されてから早いもので八ヶ月の月日が経ちました。昨年の十月には台風十五号・十九号と続き、その直後の大雨などもあり各地に甚大な被害が及ぼされました。令和の幕開けは、残念ながら自然災害という大きな爪痕が残されたように思います。

平成の時代にも東日本大震災をはじめ数々の自然災害がありましたが、その度に現地に赴き、被災者の方々に寄り添う上皇上皇后陛下のお姿が思い出されます。

新しい時代の天皇皇后両陛下におかれましても同様に、必ずや国民に希望を与え続けて下さる存在となりますことを願っております。

今年の夏は東京オリンピックが開催されますが、陛下がお生まれになった昭和三十五年にはローマオリンピックが開催されており、四年後の東京オリンピックに向けて東海道新幹線の整備、首都高速道路の建設など正に五輪景気が始まろうとしている時代でした。

高度経済成長の幕開けでもあり、世の中全体が好景気に浮かれ始めていたことでしょう。

しかしながら六十年後の現在、当時のインフラ整備も老朽化し、様々な問題が生じ始めております。いつの時代でも目先のことだけに囚われず、常に次世代にも目を向ける大切さを約半世紀経った今も教えられているような気がします。

唱歌のふるさと 童謡のくに④

著：佐山哲郎

＊悪童、はばたく＊

さて日本の童話というとき、避けて通れないのがサトウハチローである。作家、佐藤紅緑の長男、紅緑は『嗚呼玉杯に花うけて』で一世を風靡した。その流行作家の子ハチローはとんでもない悪童であったという。異母妹に作家佐藤愛子がいる。彼が愛したものは、横町、広っぱ、野球、母親、人間天皇、と『日本文学事典』にはある。しかし一旦、文学への目覚は早熟でもあった。

第一詩集『爪色の雨』は二十三歳、大正十五年であった。童謡との出会いはもっと古く十五歳。西条八十の門を叩いている。爆発的に人気を得るのは、昭和二十年代の童謡復興期に「かわいいかくれんぼ」「ちいさい秋みつけた」など名作が発表された。

＊もずが枯れ木で＊

しかしハチローの詩は人格とは無縁に、人の心を打ったのである。

もずが枯れ木にないている
おいらはわらをたたいている
わたびき車はおばあさん
こっとん水車もまわっている
みんな去年と同じだよ
けれども足んねえものがある
兄さの薪割る音がねえ
バッサリ薪割る音がねえ
兄さは満州へいっただよ
鉄砲が涙で光っただ
もずよ寒くもなくでねえ
兄さはもっと寒いだぞ

兄弟、という絆もハチロー得意のテーマの一つである。

法然上人の御生涯④ 比叡山での御修行

母に別れを告げた勢至丸（法然上人）が故郷から遠く離れた比叡山にいたったのは、天養二年（一一四五）十三歳の時のことでした。比叡山では最初に持宝房源光上人の下を尋ねました。叔父の観覚上人が持たせた手紙にはただ「進上、大聖文殊像一体（大聖文殊像を一体差し上げます）」とだけ書かれていました。しかし勢至丸は何も持っていません。観覚上人は、勢至丸のたぐいまれなる聡明さを表現するために智慧にすぐれた文殊菩薩と例えたのです。源光上人はすぐにこの子が聡明であることを知り入門を許可しました。

勢至丸の非凡な才能と道を求める強い意志を目の当たりにした源光上人は、碩学（修めた学問が広く深い人）につけて天台宗の奥義を極めさせようと、当時比叡山随一の学識と名声をもった功徳院皇円阿闍梨のもとへ勢至丸をおくりました。ここで今までの稚児髪を剃髪して頭をまるめ、戒を授かりました。正式に僧侶としての生活が始まったのです。時に久安三年（一一四七）十五歳の時のことでした。

あるとき勢至丸は、出家を果たした今、隠遁して草深い山中に逃れたいと思っていることを、師匠の皇円阿闍梨に申されたところ、皇円阿闍梨は、たとえ隠遁の志があってもまず天台三大

一口法話

「自分の心をみつめる」

あるテレビ番組で『天気予報では「今日は良い天気」、「明日は悪い天気」ということが多いが、正しくは「自分たちに都合の良い、あるいは都合の悪い天気」と言うべきだ』と言う人がいた。

確かに、晴天が一ヵ月も続けば晴れた日でも悪い天気になり、逆もまた然り。天気一つとっても自分の都合でころころと変わるのです。自分の心を見つめた時、私達は自分の都合の物差しで物事を計ってはいないでしょうか。都合の物差しとは結局の所、自分が「好きか嫌いか」「損か得か」の物差しです。

仏教ではこれを愚痴の煩悩と言います。そしてこのような心で迷い悩みを持つ人間を凡夫といいます。

「渋柿が　甘柿となる　陽の恵み」

渋柿は固い間は食べられませんが、太陽の恵みを受け自然に渋が甘味へ

部とその注釈書、合計六十巻を学んだ後に思いを遂げるのがよいといさめられました。勢至丸は普通は十年以上かかるところをわずか三年で読み終えられました。皇円阿闍梨は「学問の道に励んで、天台宗の指導者になりなさい。」と事あるごとに励まされました。しかしもとより名誉や出世に興味のない勢至丸からは全く承諾の返事がありませんでした。そればかりか、やはり名声や利得を追うための学問を嫌い、皇円阿闍梨の下を離れ、久安六年（一一五〇）一八歳の時に、西塔黒谷の慈眼房叡空上人の下に身をよせました。

勢至丸は幼少の昔から今日まで、父の遺言が忘れられず、変わることなく隠遁の意思が深いことを述べました。叡空上人はその言葉を聞き、「若いながらも早くも迷いの世界を離れる心を自然と起こした、〈法然道理〉の聖である。」と感心し法然房と号を授け、比叡山での最初の師である源光上人の源と自らの叡空の空にちなみ源空と名付けられました。かくして、叡空上人のきびしい指導の下に、あらゆる経典の読破とその実践に邁進する求道の生活を続けられることとなりました。

と生まれ変わります。煩悩は生きていても死んだ後も皆、自分を地獄に落とす心の渋です。しかし信心を起し自分を見つめ、仏様にすがる心でお念仏を称えれば、心の渋が仏様の光明に照らされて凡夫のままに救われていくのです。

「智慧第一の法然房」と仰がれた法然上人はご自身は一言もそのようなことはおっしゃらず「自分の力では救われようのない愚かな私」とご自身を深く見つめられ、ひたすらに阿弥陀様におすがりし、お念仏を申されました。

私達も自分を見つめ、阿弥陀様を信じ、お念仏を称えていきたいものです。

（総本山知恩院布教師会ホームページより）

書への誘い

「成等正覺廣大慈恩」

故林　錦洞　書

貞林院瑞正寺　住職　林　清方

隷書体で「成等正覺廣大慈恩」と書かれています。隷書とは秦・漢・唐という中国の歴史の中で出来上がってきた書体であり、全体に太く幅広の字体が特徴です。この原稿を書いている十月下旬は丁度、各地の浄土宗寺院で十夜法要が勤められている時期となります。十夜は「十日十夜」という言葉を略したもので「無量寿経」という経典の中に出てきます。「欲望の多いこの世で十日十夜の善行を行うことは、仏の国で千年の善行を行うことよりも勝る」と説かれていることから、各地の寺院では十夜法要におきまして、たとえ一日でも善行を積むべく檀信徒とともにお念仏を一緒にお唱えする訳です。

「成等正覺廣大慈恩」の意味は「罪深く愚かな私たち凡夫を救うために念仏を唱える者は全て西方浄土に迎えるという願いを立てられた阿弥陀さまが、完全な覚りを成就されたことと、その広大無辺な慈悲の恩に対し酬い奉る」というものです。

すなわち阿弥陀さまの広大な慈悲に感謝をすることが十夜法要の一番大事な心でもあります。

新しい年を迎え、今一度阿弥陀さまへの感謝の気持ちと今年一年無事に過ごさせて頂きますよう願いを込めてお念仏をお唱えしましょう。

謹賀新年

寺内一同、おかげさまで元気に年を越すことができました。

今年も心を新たに精進いたしますので、檀信徒の皆様におかれましては、今後とも寺の護持興隆にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

子年の守り本尊は、千手観音菩薩です。千本の手、つまりあらゆる方法で人々を救おうという強い慈悲を表わしております。観音さまのご加護により、今年一年皆さまが平安に過ごされることを心より祈念申し上げます。

令和二年庚子　元旦

貞林院瑞正寺
住職　林　清方
副住職　林　良政
法類総代　林　英道
同寺総代世話人一同

令和二年 年中行事のお知らせ

本年の行事につきましては、下記のとおり予定しております。近づきましたらあらためてご案内いたしますので、お誘い合わせの上ご参詣ください。

＊春・秋彼岸会法要につきましては、寺報にてご案内をしております。お中日に塔婆回向をしておりますので、塔婆をご希望の方は電話・ファックス、メール等によりお申し込みください。

＊春彼岸会法要　三月　二十日(金)
施餓鬼会法要　五月　十四日(木)
七月お盆法要　七月　十二日(日)
八月お盆法要　八月　十三日(木)
＊秋彼岸会法要　九月二十二日(火)

＊魚藍観音像が寄進されました＊

昨年四月に中山幸一様より魚藍観世音菩薩像（象牙一本彫り）が当山にご寄進されました。ご母堂さま（中山辰子様・享年九十一歳）の四十九日忌法要にあたり亡き母へのご供養にと納められたものです。

故辰子様は生前、大変に観音信仰に篤く、ご自身の信心から多くの方々のお力にもなっていたというお話を聞いておりました。この魚藍観音像はご自身が自宅にお祀りして信仰されていたものだそうです。

当山には元々二体の魚藍観音があり、いずれも旧貞林寺から転座されたものですが、この度のご寄進により三体の魚藍観音像が並ぶことになりました。

従来の二体の内、小さな厨子に入っているのが寺宝でもある高村光雲作のものです。高村光雲は明治から昭和初期の彫刻家で日本近代彫刻の祖として有名です。旧姓は中島で旧貞林寺に中島家の供養としてこの魚藍観音像を納めたという記録が残っています。

「象牙彫りの魚藍観世音菩薩像」

「三体の魚藍観音像が勢揃いしました」

光雲の有名な作品としては上野公園の「西郷隆盛」や皇居広場の「楠木正成」などがあります。

魚藍観音は中国唐の時代に、仏教心の薄い村の若者たちに仏法を広めるため、魚を竹籠に入れて行商する美女に姿を変えて現れたといわれています。

お姿が魚を入れた籠を提げていることから、古くより漁師などから海上安全、大漁祈願として信仰されてきましたが、これらのご利益が転じて交通安全、商売繁盛、合格祈願などの対象にもされるようになったようです。

当山にお越しの際は御本尊だけでなく是非魚藍観音にもお参り下さい。

（貞林院瑞正寺）